

スーパービクセン・トラブル・ツアー 4

「どういうことだ、これは！」

十人の信者を連れて戻ってきたイシスは、五人の無残な姿と、血文字を書きつけられた岩を見比べながらわめいた。

——イシスへ。イシュタールはあずかった。れんらくをまて。

「誰かが、イシュタールさまを誘拐したんですな」

咳く早坂にイシスは平手打ちを浴びせ、股間を蹴りあげた。

「そんなことは分かってら！ だが、こんな真似をしたかってことだよ」

「す、すいません」

早坂は股間を片手で押さえ、片手でくずおれそうな体をやっと支えながら、呻くように謝罪した。目から涙が溢れそうになっている。イシスはわめいた。

「おい！ 山狩りだ。みんな手分けして、イシュタールを探すんだ！」

「そ、それは危険です」

「なんだとお！」

「この五人を倒し、あのイシュタール様を誘拐したほどの敵です。いったい何人いるのか、どんな武器を持っているのか」

「なんだと、この意気地なし！」

イシスは早坂の顎を蹴った。早坂は仰向けに倒れた。

「お、お待ちください」

早坂につぐナンバー2の亀山が叫んだ。

「相手が銃など持っていたら……それに、下手をするとイシユータル様のお命だつて危ないんです。ここは相手の出方を見て……」

「かわいいそうなイシユータル」

イシスは突然、両手で顔をおおってわんわん泣き出した。

「ごめんね……こんな使えない部下ばっかで……かわいいそうなイシユータル……」

「なにい、宝石は全部、コスモの連中がさらっていったとお！」

柏田はわめき、木に縛りつけられてふてくされた表情のイシユータルの胸ぐらをつかんだ。

「あ、あれは俺のなんだ！ 返せ！」

「るせーよ、じじい！」

イシユータルは柏田に唾をはきかけた。柏田はかっとなって彼女の頬を平手打ちにした。

「よしなよ」

優美が止めた。

「とにかく、ここは交渉するしかないよ。こいつを材料に、宝石を返してもらおう以外にねーだろ」  
「そーだよ」

江梨が言葉を添えた。

「優美が咄嗟に機転きかしてこいつをさらってこなかったら、手が出なかったんだからね」

「それで、どうするの？」

亜紀が訊ねた。

「まずは安全な隠れ場所を見つけることだね」

「ここに来る途中、昔の……えと、なんだっけ？ あの洞穴」

「防空壕の跡？」

「そうそう、そのボークーゴー。そこがいいんじゃないかな」

「よし、そうしよう。そこに落ちついたらさっそく交渉だ。全部返せつてのは無理だから……そうだね。半分つてどこでいいんじゃないかな」

「半分だと！」

柏田がわめいた。

「ただできえ、五つに山分けてのに、また取り分がなくなるのか？」

「しょうがないだろ。五人も使い物にならなくさせちゃったんだ。それで全部返せつてふっかけたら、逆切れして何するか分からないぜ」

「ぎ、貴様は、いつリーダーになったんだ！」

柏田は顔を真っ赤にして怒鳴った。若菜が言った。

「おっさん、よしなよ。優美の言うとおりだよ。相手は二十人、しかも元ヤクザやチンピラなんだから。他に手はないよ」

「へっへっへっ」

イシュタールが嘲笑った。

「最初から仲間割れ？ どーすんの、そんなことで」

防空壕は二つ並んでいた。一つの壕には、内部に鉄の柱があった。そこにイシュタールを縛りつけ、交代で一人ずつ見張りをつけることにした。残る一つに、後の五人が入った。

翌朝、優美は交渉のため、コスモの施設に赴いた。江梨は万一のために残しておく必要がある。若菜や亜紀、松野や柏田を連れてゆく考えは最初からなかった。四人とも、交渉の途中で何を言いたすか分からないし、いざとなったら信用できない。足手まといの味方くらい迷惑なものはない。

前の夜、彼女は一人で施設まで行き、投げ文を放り込んでおいた。こちらは一人、相手はイシスのほか随行は二人までと条件をつけた。

崖崩れの跡に着くと、イシスは、早坂と亀山を連れて交渉場所に着いていた。念のため、すぐ

には姿を表さず、周囲に伏兵がないかどうか確認したが、その様子はなかった。

「あんたがイシス？」

「そうだ」

イシスは腕組みし、険しい表情を崩さぬまま答えた。

「お前は？」

優美は微笑み、返事をしなかった。

「一人か？」

「今はね。仲間は、ある場所に待機してる」

「なぜ、イシュタールをさらった？」

「ちよつとわけありでね」

優美は言った。

「昨日、あんたらが持ちかえった宝石、あれ、ほんと私らのものなんだ」

「どういうこと？」

「五十年前、私の祖父はここにあの宝石を埋めた。やつと捜し当てたら、あんたらにさらわれたつてわけさ。ほんと正々堂々と返してくれって言いたいところだけど、あんたらの様子を見ると、頼むだけ無駄って気がしてね。ちよつと荒っぽかったけど、妹さんを預らせてもらったわ

けさ。ところで、あの五人はどうなった？」

「追放だよ」

イシスは乾いた声で言った。

「追放？」

「イシユタールを守れなかったクズだ。裸にして、遠いところに捨ててこさせたよ」  
「かわいそうに」

優美は溜め息をついた。イシスはにやりと笑った。

「どうせ、みな発狂してた。怪我が直っても使い物にはならなかったろうさ」

「冷たいんだね」

「そんなことは、どうでもいいんだ。そんなことより、条件はなんだ。まさか、宝石を全部よこつていうわけじゃあねえだろうな」

「全部と言いたいけどね。だってそうだろ？ もともと私らのものなんだから」

「そうはいくかあ。見つけたのはこっちなんだ」

「まあまあ落ちついて最後まで聞きなよ」

優美は笑い、地面に座った。

「あんたらも座ったら？ 落ちついて話をしようぜ」

薄暗い防空壕の中で、イシユタールは目を覚ました。手首や腕の筋がひどく痛む。後ろ手に回されて縛られたままなのだ。両足首は前に投げ出しているが、やはり固くロープで縛ってあった。

入口までは六く七メートル。光がぼんやりと差し込んでいるが、外からわからないように、草や木の枝をかぶせているために薄暗い。

「起きたかい？」

目の前に、貧相な顔に眼鏡をかけた男がしゃがんでいた。登山帽にヤッケ。山男のようなスタイル。六人のなかで、いちばん目立たなかった奴だ。手に乾パンを持って、差し出している。

「食べなよ。こんなものしかないけど……まあ、もう少しの辛抱だから」

口調は優しく、表情は柔和だった。イシユタールは乾パンに目をやり、ふいと横を向いた。

松野は苦笑した。

「悪かったね。僕は……ほんとはこんなことするのの本意だったんだけど、我慢してくれよ。いま、仲間の一人が、君の姉さんたちと交渉してる。多分、まとまると思う。血を分けた姉妹だもの。きつと、こっちの要求に応じてくれるよ。そうなれば、すぐに返してあげるから」

イシユタールは顔をあげ、松野を見つめ、それからうつむいた。肩が震えていた。

「どうした？」

松野は彼女の顔をのぞきこんで驚いた。イシユタールは涙を流していた。

松野は困惑し、きよろきよろ周囲を見回し、それから彼女の肩に手をかけようとして引つ込め

た。こういう場合、どうしていいから分からない。

イシュタールはひつくひつくとしやくりあげていたが、やがて泣きぬれた顔をあげた。

「……お前、いい人だな」

「え」

「こんな優しい奴、会ったことないよ」

松野は、顔を真っ赤にした。これだけの美少女からそんな台詞をはかれたのは初めてだった。

「パン、食べたい。食べさせてくれる？」

松野はどぎまぎしながら、乾パンを差し出した。少女の形のよい唇が乾パンに食いついた。だが、すぐに口を離した。

「やっぱり自分で食べたい」

「え」

「お行儀悪いし……あなたにも、なんだか悪いから」

「いや、そんなことないよ」

「手を前に出していい？ 縛ったままでいいから」

松野はさすがに躊躇した。後ろ手に縛った両手を前に出すには、一度、ロープを解かなければならない。だが、少女の潤んだ瞳に見つめられた松野は、ちょっとだけなら、と決心した。

松野は少女の背後に回り、手首のロープをほどいた。少女は嬉しそうに両手を二度、三度振っ

たが、すぐに両手を合わせて前に差し出し、「はい」と松野を促した。松野は少女の前にまわり、手首にロープをかけた。

その瞬間、松野は額に重い衝撃を覚えた。視界が一瞬にして閉ざされた。

イシュタールは、松野の額に頭突きを食わせたのだ。

松野は仰向けにひっくりかえった。イシュタールはすかさず、両足を縛られたまま松野に覆いかぶさった。豊かな乳房で松野の口を塞ぎ、左手と自分の体で上半身をしっかりと押さえつけ、右手を股間に伸ばして睾丸をつかみ、ぐいとひねった。

乳房の下で松野の絶叫が押しつぶされた。体が激しく痙攣し、何度もイシュタールの小柄な体を跳ね返そうとバウンドした。イシュタールは構わず、睾丸をひねりあげた。親指と人差し指で玉をつまみ、中指で動かぬように支え、全身の力をこめた。

「ぐふっ」

彼女の乳房の下で松野が呻き、体が硬直した。イシュタールは睾丸を一つ、ひねり潰したのだ。イシュタールは体を起こした。松野は白目を剥き、苦痛に歪んだ口から涎が垂れている。

イシュタールはにやりと笑い「ばーか」と小声で囁いて立ち上がった。顔を顰めて両足のいましめを解いた。足首を縛った跡が蚯蚓腫になっている。

「野郎……」

彼女はいまいまいしそうに呟き、たった一つ残った睾丸に踵を乗せ、体重をかけた。二つ目の辜

丸が潰れ、松野は大きく痙攣して完全に動かなくなった。

イシュタールは、今度は松野の喉笛に踵を乗せた。ぐきつと音がして喉仏が潰れ、脛骨が折れた。松野は血反吐をはき、絶命した。

「おい、交替だぞ」

入ってきたのは柏田だった。柏田が、だらしなく仰向けになって白目を剥き、血反吐をはいている松野と、完全に自由になって立っているイシュタールを見比べ、目を見開くより早く、イシュタールが柏田に飛び掛かり、足の甲を股間に叩きつけた。

柏田の鞆丸はすでに亜紀と若菜によって潰されていた。だが、陰囊の傷口が裂け、血が噴き出した。柏田は血を噴く股間を両手で押さえ、膝をついた。

イシュタールは、柏田の真つ赤な股間に一瞬ぎよつとしたが、すぐに柏田の背後に回り、後頭部に回し蹴りを浴びせた。柏田は口から泡を吹いてうつ伏せに倒れ、動かなくなった。

イシュタールは、そつと柏田の股間をまさぐり、「なあんだ、もう潰れてたのか」と呟いた。それから彼を仰向けにして、松野と同じように喉笛を踏みつぶして殺した。

異変に気づいたのは江梨だった。

洞窟の内部から異臭が漂っているのに気づいた彼女は、警戒しながら飛び込んだ。そして、松野と柏田の死体を発見した。江梨は叫んだ。

「若菜！ 亜紀！」

池のほとりでは、優美とイシスの交渉が続いていた。

イシスの隣にいた早坂は、イシスの冷静さに舌を巻いていた。昨夜は、彼女がこの世でただ一人情愛を示す対象である妹を誘拐された憤りから、荒れまくっていた。

だが、優美を前にしたイシスは冷静そのものだった。巧みに相手の言質をとり、少しでもこちら側に有利な条件にもつていこうとする。外交官的なセンスは、これが、己の感情をすべて暴発させるだけの凶暴なイシスかと意外だった。

「じゃあ、こちらは宝石の半分を渡す、あんたらはイシュタールを無事に返す、それでいいね」

「いいよ」

優美は言った。

「引き渡しの場所は？」

「どこでもいい」

「そうはいかないね」

優美は断った。

「ここは、あんたらのアジトに近すぎる。それに山のなかは隠れる場所も多い。麓の、運動公園に午前四時頃というのはどう？ いまの季節ならもう明るいし、人目もないし」

イシスはしばらく俯いて考えていたが、ふと顔をあげた。目が一瞬、輝いた。優美はその輝きの意味を判断しそこねた。あつと合点がいったとき、イシスが立ち上がり、猛然と蹴りをくりだした。優美は危うく、両手で体をガードし、イシスの蹴りを受けた。その瞬間、後頭部に激しい衝撃を覚え、昏倒した。

「やったね！」

イシスは、うつ伏せに倒れた優美の体を飛び越えたイシュタールとハイタッチをし、がっちりと抱き合った。

防空壕から逃げてきたイシュタールは、池のほとりで、姉と優美が座って話し合っているのに気づいた。足音を忍ばせて優美の背後に近づいた。そのとき、イシスがイシュタールの存在に気づいた。イシスのとつた行動は合理的だった。優美が背後のイシュタールに気づかぬよう、蹴りを繰り出して気を逸らせたのだ。

「よく逃げだしてきたね。大丈夫だった？」

「ちよろいもんよ。二人、玉を潰して殺してやった。あとは女が三人。強そうなのは一人だけで、あとの二人は雑魚よ。もうすぐおつかけて来るだろうけど、私らだけで十分対処できるはず」

「よくやった。おい、亀山！」

「はいっ」

亀山が弾かれたように立った。

「すぐに連中をここに呼べ」

「はっ」

亀山が指笛を吹いた。少し離れた森の茂みのなかに潜ませていた信者たちが十人ほど、姿を現した。イシスは命令した。

「おい、お前ら二人は、この女を縛って、アジトに連れていけ。あとは私らと一緒に、残る三人を捕まえる、いいね」

「生かしておくの？」

すぐに殺せばいいじゃん、と言いたげなイシュタールに、イシスは答えた。

「時間をかけてなぶり殺しにしてやるのさ」

「さ、早く！」

江梨は、早くも息があがっている亜紀と若菜を叱咤し、山道を走った。

「あいつがアジトに逃げこんじやったら、おしまいだよ」

「……まったく、あいつら、ほんとに使えないんだから」

亜紀が、ひいひいと喉を鳴らしながら毒づいた。

「う、吐きそう……」

若菜は顔を歪めた。江梨は再び背後を振り返って叫んだ。

「もう少し、がんばって！ ひよっとすると優美も危ないかも……」

その瞬間、彼女たちの頭上から、大きなネットが振ってきた。その重量に、三人は倒れた。這い出そうともがく三人に、青服が殺到した。

その頃、池の辺から「施設」へと続く山道を、両手を縛られた優美が歩いていた。背後には、優美を縛ったロープの先端を持つ青服がいた。彼女の隣で、油断なくナイフを喉元に押し当てている別の青服もいた。

優美は、ふと、ナイフを突きつけている男の股間を見た。青いズボンの股間がテントを張ったように突っ立っていた。優美はおかしくなって、けらけら笑い出した。

「何がおかしい！」

頭をスキンヘッドにした青服が怒鳴った。

「なに怒ってるの？ 勃起してるくせに」

「な、なんだと……」

うろたえた青服に、優美は微笑みかけた。

「よほど溜まってるんでしょ。おまけに、あの姉妹には毎日股間を蹴られて……」

「や、やかましい」

「どうやって処理してんの？ オナニーとかするわけ」

「お、俺たちは修行中だ。そんなことを……」

「まあ、その調子じゃまだまだ煩惱が抜けてないみたいね。なんなら、ここで抜いてあげてもいいんだよ」

青服はごくりと唾を飲んだ。

「あー、マジになってる。嘘だよーん。お前みたいなブサイクな奴、相手する気になるもんか」「て、てめえ……」

青服は優美を殴りつけた。優美は、紐を持っていた背後の青服とともに、横倒しに倒れた。今だ！ こんなに簡単に引っ掛かるとは思ってもみなかった。

優美は、頭を思い切り振り上げ、後頭部を背後でばたついている青服の額に叩きつけ、ぱっと起き上がった。ナイフを持っていた青服は、しまったと狼狽し、きえええ、と奇声をあげてナイフを突き出して突進してきた。

優美は片足を撥ね上げ、青服の右腕に叩きつけた。青服はナイフを取り落とした。優美は、その股間に思い切り足の甲を叩きこんだ。青服が両手で股間を抑えてうめいた。優美は、その顎に回し蹴りを食わせた。青服の体が吹っ飛び、背後の杉の木に叩きつけられた。

青服にとって不運なことに、ちようと青服の背中あたりに、折れた木の枝が伸びていた。切っ先が尖った枝は、青服の背中から腹部にかけて貫通した。青服の体が痙攣し、目が絶望的に見開



かれ、大きく空いた口から悲鳴が迸った。

「騒ぐな、ばか」

優美は、杉の木に突き刺さった青服の股間を膝で三度、蹴りあげた。辜丸が潰れ、青服は血反吐を吐いた。

振り向くと、もう一人の青服が、上半身だけを起こし、額をこすりながら朦朧とした視線を四方に彷徨わせていた。やがて視線が優美を向いた。焦点があつてきたようだ。青服は、両手のいましめを解き、すつくと立っている優美と、杉の木に串刺しになった無残な仲間の姿を見て、わつと大声を出して腰を抜かした。

優美はゆっくりと青服に近づいていった。青服はがたがた震えながら、「わ、わ……」と言葉にならない叫びを漏らし、両手をさかんに振り回して、尻で後ずさりした。

「気の毒だけど、見逃してやるわけにはいかないんだよね」

優美はにっこりと笑った。青服は恐怖に目を見開いた。

三分後、もう一人の青服が、同じ杉の木に串刺しになった。二人とも、口から血反吐を垂らし、辜丸を砕かれ破裂させられた陰囊から血を滴らせ、断末魔の苦痛に呻きながら、ゆっくりと近づいてくる最後の瞬間を待っていた。

「施設」は、山の中腹を切り開いて建てられていた。

コンクリートのあちらこちらにヒビ割れがあつた。いくつかの窓には板が打ちつけられている。ガラスがなくなつたのだろう。修復して使っている様子はない。養護施設が閉鎖されたところに、もぐり込んでいるだけのようだ。

建物の三方は、崖に囲まれている。優美は、建物を見下ろせる茂みに身を潜めた。そこからは「施設」の玄関がよく見えた。

やがて、山道から青服の群れが現れた。青服たちの先頭はイシスとイシユータル姉妹だった。七人の青服が、後ろ手に縛られた江梨、若菜、亜紀を囲んでいた。玄関を警備していた青服が直立不動で出迎えた。

青服たちは、三人を突き飛ばすようにして建物の内部に押し入れた。イシスとイシユータルも建物に入った。

——松野と柏田はどうなったのだろう……。

あの江梨がつかまって、松野や柏田が無事に逃げきれたとも思えない。

優美は迷った。ともかく、三人を助け出さなければならぬ。だが、捕虜が江梨一人ならともかく、頼りにならない若菜や亜紀まで捕まっている。雑魚の青服どもはともかく、イシスやイシユータルがどの程度の腕の持ち主なのかも分からない。施設の内部の様子も分からない。

あるいは、防空壕の跡に戻るべきか。松野か柏田が生き残っているかもしれない。

優美は迷った挙げ句、一度、防空壕跡に戻ろうと決意した。いずれにせよ、明るいうちは動きようがないだろう。

防空壕には、無残に鞆丸と喉笛を潰された二人の男の死体があるだけだった。優美は二人の体を調べた。イシユタールという妹が一人でやったとしたら、相当な腕の持ち主だった。皮膚の打撲傷のある部分は、必ず骨が折れていた。しかも一撃だった。確実に急所を突いていた。

二人とも、表情が苦痛と恐怖に歪んでいた。虫の好かなかった柏田はともかく、松野の死はさすがに哀れを催した。

——仇はとってあげる……。

優美は口のなかで呟いて、防空壕跡を出た。